

[特別活動]

ショートスピンの相互評価を生かした生徒会活動の取組について

高橋 淳一*

1 はじめに

当校は、周囲を田園地帯に囲まれた自然豊かな地域に存在する。自治体の人口は多くはないものの、人口の流出入が穏やかなため生徒は落ち着いた環境で学校生活を送ることができている。また、国道も近く交通網が整備されているため、近隣の都市への移動も容易である。そのため、インフラ面や物資面で大きな不便を感じることも少ない。そのような環境のためか、生徒は大きな変化を好まずチャレンジ精神がやや希薄である。また、自らの手で何かを作り上げるという経験が少なく、指示を与えられることを待つ傾向にある。筆者は、生徒に失敗をおそれずにチャレンジする意欲と、自らの手で改善していこうとする意識を高めるためには、生徒会活動に全校生徒による相互評価活動を取り入れることが有効であると考ええる。

生徒会活動は、中学校学習指導要領で「生徒会活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団や社会の一員としてよりよい学校生活づくりに参画し、協力して諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度を育てる」と示されているとおり、現状に甘んじることなくよりよい集団を生徒自らの手で形成しようと努め、諸問題から目をそらさずに解決への方策を探る姿勢を育む重要な教育活動である。また、生徒自身の手による自治的・自主的な活動の活性化は自らの所属感や肯定感を高め、学習や部活動に意欲的に取り組む原動力となる。生徒会活動で育まれた高い意欲は学習や部活動の教育効果を一層高め、教育活動全体へ好影響を及ぼすことが期待でき、ひいては学校全体のより良い伝統や望ましい校風を作り上げる鍵となると考える。

評価活動を取り入れた生徒会活動は、荒木(2009)、佐藤(2010)がその有効性を述べているが、ともにリーダーの変容が中心であった。また、黒田(2010)は相互評価を活用し、「縦」「横」「斜め」の児童のつながりを生む実践を行っているが、対象が小学校であった。そこで本稿では、筆者が平成22年度から23年度にかけて行った相互評価を活用した生徒会活動の取組におけるリーダーとフォロワーの変容に関する実践研究を述べる。

2 実践上の課題

当校の生徒の課題として、全校生徒が保育園から小学校、中学校とほぼ同じメンバーで過ごしてきているため、固定化された狭い人間関係・社会関係で物事を判断してしまう点があげられる。そのため、生徒会活動において以下のような場面で課題が見受けられた。

- 1 小学校からのリーダー経験者ばかりが選ばれ、リーダー職に対する充実感・達成感よりもやらされ感が強く、魅力が感じられるものではなくなっている。
- 2 やらされ感が強いいため、新しいことにチャレンジしようという改善意識が弱く、「例年どおり」の事なかれ主義の傾向が強い。
- 3 リーダーに対するフォロワーの協力意識が低く、生徒会の一員であるという自覚が薄いため、生徒会活動全体に対して無関心である。
- 4 フォロワーは悪い点に対する批判はできるが、改善点を明確にしたり代案を提示したりするような建設的な意見が出せない。

* 刈羽村立刈羽中学校

筆者が平成20年度に現任校に勤務した当初は、生徒会が主体となって資源回収運動を行い、車いすの寄贈という目標に向かって全校生徒が活発に回収活動に参加をしていた。しかし、生徒会本部や委員会の日常活動は「例年どおり」という雰囲気が見られ、表1が示す通りフォロワーの生徒会への関心は決して高いものではなかった。

翌年に車いすの寄贈が達成されるとその風潮は一層顕著となり、リーダーが新しい活動を計画しても単独・単発的に終わってしまったり、フォロワーたちの願いから乖離した独善的なものであったりしたために、フォロワーたちの関心や活動意欲が低下するという負の連鎖に陥ってしまった。そのため、リーダーもフォロワーもともに生徒会活動に「参画」（主体的に計画段階から加わる）しているという実感はなく、昨年同様の計画に「参加」しているという状況が生まれていた。

また、前年度までの当校における生徒会活動の評価は、年2回の生徒総会のみであった。前期生徒総会は4月末に行われていたため、リーダー性の育成が不十分であることに加え、委員会の構成員の大幅な入れ替わりや顧問の変更もあり、年間を見通した話し合い活動とはほど遠いものとなっていた。さらに入学したばかりの1年生には生徒会活動への理解は期待できるはずもなく、まさに「参加」しているだけの状態であった。そのような立ち上がりであるため、後期生徒総会において出される意見は、「〇〇活動ができていなかったのだからちゃんとしてください」といった委員会活動への批判や揚げ足とり、「球技大会をしてほしい」といった個人的な楽しみに依拠したような要望ばかりであった。そのような生徒総会では1年間努力をしてきたリーダーたちの努力が認められ、充実感が味わえる場面は期待できず、フォロワーの意見が生徒会活動に反映され、所属感をもたせることは望めなかった。

リーダーが「例年どおり」の悪習に甘んじ、フォロワーも何の疑問も抱かずに受け身で活動に参加しては、学校を変えることはもちろん、社会の構成員としての公民的資質を育成することは期待できない。また、フォロワーが改善要求をしたくてもその機会が与えられていなければ、「喉元過ぎれば熱さを忘れる」ように同じ失敗を繰り返すことになってしまう。主権者の一人として受け身ではなく能動的に自治に参画し、批判的な視点を養っていくためにも、ショートスパンでの評価活動を通じて、所属意識と改善意識をもてる生徒を育成したいと考えた。

3 実践課題の解決の手だて

当校の生徒会は生徒会本部と7つの専門委員会で構成されており、月に1度設定されている専門委員会で活動の企画・立案、活動の反省を行っていた。また、生徒会主催の生徒朝会が月に1度、リーダー同士の意見交換の場である自治委員会が不定期で開催されていたが、それぞれの開催期日に計画性が無く、生徒会活動全体に連続性や必然性が無くなっていた。特に自治委員会は生徒会活動の中核となる重要な話し合いの場にもかかわらず、生徒会行事の前に連絡事項を伝える程度の機能しか果たしていなかった。そこで各集会につながりを持たせ、有機的に機能させるためにも全校生徒による相互評価と、専門委員会・自治委員会・生徒朝会を次のように配列した。

表1 生徒会活動に意欲的に参加しているか

| 学 年 | 肯定的評価 | 否定的評価 |
|--------------|-------|-------|
| 2年生 (現3年) | 55% | 45% |
| 1年生 (現2年) | 78% | 22% |

① 全校生徒によるショートスパンの評価活動の実施

→前年度からの取組である教育活動の5期制に合わせて年5回の評価活動を実施する。評価されることで自らの役割に責任を感じさせ、評価することで生徒会活動への関心を高める。(フォロワーの無関心の改善)

② 評価内容の自治委員会での共有、リーダー同士での改善策検討

→委員会活動が数値で評価されるため、リーダーが自己の委員会運営を客観的に振り返ることができ、責任ある行動の自覚につながる。生徒の意見・要望がショートスパンで直接届くため、取組への手応え・充実感が得られやすく、改善策の指針をもちやすい。改善策の検討を他のリーダーと検討し合うことで、独りよがりな改善案からの脱却を図り、リーダー性を高め合う。(リーダーの責任感の向上、改善意欲の向上)

③ 評価活動の結果と改善案を生徒朝会で発表

→評価活動から間を空けずに生徒朝会で発表の場を設けることで、双方向の意見交流が生まれフォロワーの生徒会活動への所属感を高めることができ、取り上げられた意見・要望から建設的な意見の出し方を学ぶことができる。(フォロワーの所属意識の醸成、協力意識の向上)

④ 計画の実行, 再評価

→フォロワーの要望に添った計画性のある取組が行われることで、リーダーは自信をもって活動に取り組むことができ、再評価により達成感を得られる。フォロワーは評価者として生徒会活動全体への関心が高まり、被評価者として委員会活動への責任感が生まれる。

(リーダーの改善意欲の向上, フォロワーの所属意識の醸成, 責任感の向上)

4 実践の成果と考察

(1) 全校生徒によるショートスパンの評価活動の実施

第1回活動評価は第1期安心期から第2期全力投球期へと移行する5月末に行った。評価対象は生徒会本部と本部内の広報担当, ボランティア担当, 7つの専門委員会の計10委員会とし, 資料1のようにそれぞれの活動を4段階(4大変良い, 3良い, 2やや物足りない, 1物足りない)で評価する評定法と, 良かった点と改善点を記述する自由記述法を組み合わせで作成した。結果は多くの委員会・担当の肯定的評価(4と3の合計)が90%以上となり, 広報担当やボランティア担当は99%以上という高水準に達した。これは両担当が生徒会本部内の組織であり, 他の委員会に先駆けて1月に代替わりをしていたため, 継続的な活動が評価されたためだと考えられる。一方で2段階評価(肯定的評価と否定的評価)で高評価だった委員会も, 表2のように4段階評定の平均値で表すと大きな差が見られた。

資料1 生徒会活動評価用紙

第二期 安心期 生徒会活動評価用紙

～練習に集中し、協力し合い、勝利の道へ～

年 組 名 前

評価基準 4…大変良い 3…良い 2…やや物足りない 1…物足りない

【対中あいさつ評価】
あなたは「大きく・元気よく」あいさつができましたか? 4 3 2 1
(第三期は「はっきり」が重点目標になります)

【自分の委員会活動評価】
あなたは自分の役割に責任を持って行い、生徒会活動の活性化に努めましたか? 4 3 2 1

| | 今期の活動 ◎自主活動 ◎他部活動 | 活 動 評 価 | 委員会へのメッセージ欄 | |
|--------|----------------------|------------|--------------|--------------|
| | | | 上段:○良かった点や活動 | 下段:▲意見や改善の要望 |
| 本部 | ◎日本一の集會 | 4 | ○ | |
| | ◎全才あいさつ | 3 | | |
| | ◎反愛集會 | 2 | ▲ | |
| | ◎運動部 ◎生徒会役員 | 1 | | |
| 広報 | ◎行事ポスター | 4 | ○ | |
| | ◎ニュースーパー | 3 | | |
| | ○掲示物管理 | 2 | ▲ | |
| ボランティア | ◎資源回収 | 4 | ○ | |
| | 村への呼びかけ | 3 | | |
| | ◎ペランダ清掃 | 2 | ▲ | |
| | ○資源回収 | 1 | | |
| 生活 | ◎チャイム着席 | 4 | ○ | |
| | チェック | 3 | | |
| | ○あいさつ当番 | 2 | ▲ | |

表2 第1回活動評価の結果

| 委員会名 | 1年生 平均 | 2年生 平均 | 3年生 平均 | 全校 平均 |
|----------|-----------|-----------|-----------|----------|
| 生徒会本部 | 3.70 | 3.58 | 3.47 | 3.6 |
| 広報担当 | 3.67 | 3.69 | 3.69 | 3.7 |
| ボランティア担当 | 3.62 | 3.66 | 3.41 | 3.6 |
| 生活委員会 | 3.64 | 3.35 | 3.43 | 3.5 |
| 給食保健委員会 | 3.42 | 3.43 | 3.26 | 3.4 |
| 体育委員会 | 3.59 | 3.56 | 3.19 | 3.4 |
| 放送委員会 | 3.33 | 3.33 | 3.20 | 3.3 |
| 図書学習委員会 | 3.63 | 3.53 | 3.45 | 3.6 |
| 整美委員会 | 3.64 | 3.58 | 3.53 | 3.6 |
| 応援団 | 3.88 | 3.61 | 3.25 | 3.6 |

この結果からは放送委員会の大きな落ち込みと応援団の1年生からの高評価が特徴的に読み取れる。放送委員会の自由記述欄を分析すると、「原稿の読み間違いが多いので直してほしい」「早口や声の小さい人がいて伝わりづらい」といった意見が多かった。このことからフォロワーたちは特別な企画や特定の人だけが楽しめるリクエストミュージックなどではなく, 全体に関わる日常活動に重きを置いていることが読み取れる。また, 応援団は各種激励会に向け, 1年生を対象に応援練習を精力的に行っていたため, 高評価につながったと思われる。このことから, 活動の場面が全校

生徒の目に触れる委員会ほど, 極端な評価を受けることが分かった。

全校生徒の自由記述欄を見ると, 依然として個人主義的な意見要望が多いものの, 「1年生同士のペアでは分からないところが多いと思うので, 1年生と2・3年生とかでやった方がいいと思います」(放送委員会)や「マラソン大会のポスターがとても良くできており, 見た瞬間に頑張ろうと思った」(広報担当)など, その期間でなければ挙がらない意見や要望, 評価が具体的に記述されるものもあった。以上のことから, 委員会ごとに相互評価を行うことや短い期

間で活動評価を行うことが、生徒会活動への興味・関心を高め、具体的な振り返りを実現する契機として有効であると考えられる。

(2) 評価内容の自治委員会での共有，リーダー同士での改善策検討

前述の活動評価の結果は生徒会本部により集約され各リーダーへと伝えられるが、何の手だても講じずに伝えていては以前までの活動と大差がなく、リーダー同士の横のつながりを生み出すこともできない。また、せっかくの意見・要望も各リーダーの資質に左右され、第2期の活動に十分に生かされない可能性があった。そこでリーダーたちには事前に結果を通知し、その改善策を自治委員会で発表させることとした。その際には担当顧問からアドバイスを受けてくることを原則とし、持ち寄った改善策を小グループのリーダー同士で検討し合う活動を計画した。その結果、評価が低かった委員会に対しては、リーダー同士で改善策を検討し合い積極的に意見が交換されていた。また、十分な改善案を計画してこなかったリーダーに対しては、リーダーとしての自覚を促す発言をする姿が見られた。それまで固定化された人間関係のため、意見の対立や話し合い活動が苦手としていたリーダーたちの向上的変容が認められた一場面であった。

自治委員会で検討された改善案はそのまま専門委員会での議題となり、生徒朝会での発表原稿の原案ともなったため、活動につながりが生まれるとともに、リーダーの負担増加を抑えることもできた。特に専門委員会ではマンネリ化した話し合いから脱却できなかつたり、具体的な活動計画が立てられなかつたりした委員会が減り、リーダーが自信をもって活動を運営できるようになっていった。

このような数値による評価やリーダー同士の話し合い活動はリーダーたちにとって初めての経験であった。そのため、高い評価や具体的な表現で活動を認められたリーダーは自信を深める一方で、低い評価を得たリーダーの活動意欲の低下する心配があった。しかし、各リーダーは評価を反省材料として受け止め、活発な意見交換の材料にできたことで評価活動の意義を実感することができた。以上のことから、数値や言語による評価活動により、リーダーの課題意識が触発され、責任感が向上したと考える。

(3) 評価活動の結果と改善案を生徒朝会で発表

自治委員会、専門委員会で検討・決定された改善策及び次期の活動予定を、生徒朝会を利用して委員長に発表させる機会を設定した。リーダーに全校生徒に対して取組を発表させることで、実践意欲を高めるとともにリーダーの自覚を醸成するためである。すでに前段階で原稿や企画内容の検討が済んでいるため、リーダーは自信をもって発表活動を行うことができていた。また、フォロワーにも自らが所属する委員会も含めた評価を視覚的に伝えることで、他の委員会への関心意欲を喚起するとともに自らの委員会活動への責任感を意識させる効果があったと考える。その根拠として、昨年度から引き続き給食保健委員長を指導する担当教諭は、次のように述べている。

給食保健委員長も全校生徒からの数値を意識して行動するようになってきている。合掌当番の声が小さいことについては、委員会で合格するまで練習をさせるなどの変化が出てきている。また、「全校生徒の前で発表したからには必ず実行しなくてはならない」と自分の言動に責任を感じているようだ。昨年度までなら、実行できなくても気にしていないようなところもあった。

(4) 計画の実行，再評価

第1回の活動評価を受け企画立案を進めていたため、各委員会とも見通しをもって委員会活動を行うことができていた。自治委員会での話し合いの成果として、生徒会本部が生徒会放送でリーダーのインタビュー特集を組んだり、広報担当が好評だった行事ポスター（資料2）を定番化したりするなど、既存の取組に工夫を加えてフォロワーの意見を活動に反映させていった。また、例年1学期末に集中するチェック活動も話し合いにより実施時期が分散し、複数の活動の同時進行によるチェック活動の不徹底をなくすることができるなど、多くの効果をもたらした。第2期を終えての第2回活動評価の結果が表3である。



資料2 定番化された行事ポスター

表3 第2回活動評価の結果

| 委員会名 | 1年生平均 | 前回との比較 | 2年生平均 | 前回との比較 | 3年生平均 | 前回との比較 | 全校平均 | 前回との比較 |
|----------|-------|--------|-------|--------|-------|--------|------|--------|
| 生徒会本部 | 3.72 | +0.02 | 3.61 | +0.03 | 3.52 | +0.05 | 3.62 | +0.03 |
| 広報担当 | 3.50 | -0.17 | 3.69 | 増減なし | 3.66 | -0.03 | 3.62 | -0.06 |
| ボランティア担当 | 3.51 | -0.11 | 3.69 | +0.03 | 3.54 | +0.13 | 3.58 | +0.02 |
| 生活委員会 | 3.35 | -0.29 | 3.43 | +0.08 | 3.40 | -0.03 | 3.40 | -0.07 |
| 給食保健委員会 | 3.00 | -0.42 | 3.43 | 増減なし | 3.35 | +0.09 | 3.27 | -0.09 |
| 体育委員会 | 3.36 | -0.23 | 3.56 | 増減なし | 3.33 | +0.14 | 3.41 | -0.03 |
| 放送委員会 | 3.19 | -0.14 | 3.48 | +0.15 | 3.30 | +0.10 | 3.33 | +0.04 |
| 図書学習委員会 | 3.54 | -0.09 | 3.64 | +0.11 | 3.46 | +0.01 | 3.54 | -0.01 |
| 整美委員会 | 3.41 | -0.23 | 3.71 | +0.13 | 3.53 | 増減なし | 3.56 | -0.02 |
| 応援団 | 3.30 | -0.53 | 3.58 | -0.03 | 3.07 | -0.11 | 3.31 | -0.25 |

表3からは1年生の評価の大幅な低下と2・3年生全体の評価の向上が見て取れる。まず1年生の評価低下の原因であるが、前回は入学後2か月間の評価であったため、中学校の生徒会活動に対する新鮮さが過大評価をさせていたものと思われる。取り組む活動全てが目新しく、自己の経験の中に比較対象が存在しなかったため、安易に最高評価をつけていたものもいたと推測される。しかし、生徒会活動が絶対的に停滞したわけではなく、4か月間の学校生活・生徒会活動を通じ、活動を評価する観点や生徒会員の自覚が高まってきたため、第2期では相対的に厳しめの評価になったと考えられる。その証拠に、昨年度までの生徒会活動を知っている2・3年生の評価が向上していることがあげられる。この2学年は昨年度までの生徒会活動も比較対象としており、その2学年の評価が向上するということは第2期の生徒会活動がフォロワーの要望に即したものであったと言えるはずである。ここで特に大きな向上を示した委員会の活動の様子を紹介する。

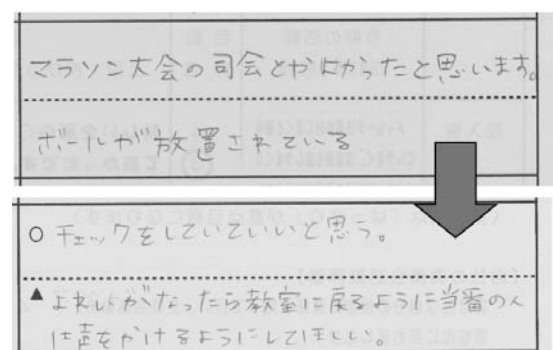
① 体育委員会

体育委員会の日常活動は体育館・格技場の利用チェックとミニスポーツ大会の企画運営、特別活動はマラソン大会の司会と球技大会の運営であった。例年の生徒総会で体育館の利用状況の改善が要望として出されていたが、ミニスポーツ大会や球技大会など一部の生徒の関心が高い活動にばかり重点を置いていた。しかし、第1期の活動評価を受けリーダーが委員に徹底した指示は「体育館の利用チェック」の強化であった。その結果、今まで形骸化していた体育館の利用チェック活動がフォロワーたちの目に見えるようになり、自由記述欄でも変容が見られるようになった。第1期では体育委員に対する記述内容では、体育館の利用チェックへの改善要望が16件、肯定的意見は11件であった。しかし、第2期には改善要望が35件、肯定的意見が80件とともに大きく増加していた。これは前述したとおり、委員の活動が見えるようになったこととフォロワー自身が意識して委員会活動を注視するようになったことと表れる。また、改善要望の中身も第1期には「ちゃんとチェックしてほしい」など活動自体を要求するものだったが、第2期には「チェック当番が毎日いて良い。ボールの片付けなどを呼びかけたらもっといいと思う」、「予鈴がなったら委員が呼びかけをして、授業に遅れないようにした方がよい」、「片付けは使った人が片付ける方がよいと思う。委員は自分で片付けずに呼びかけをしてはどうか」など、より良い取組の具体例を示していたり、学校生活全体の向上を考えた意見が見られたりするようになった。

② 放送委員会

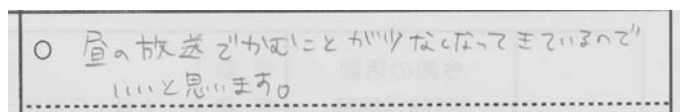
放送委員の日常活動は、朝・昼・下校時の放送当番、各種行事での放送設備の準備など全校生徒の活動に密接に結びついているものが多い。特別活動としては全校生徒からリクエストを募り、昼の放送で音楽を流すリクエストミュージックを行っている。しかし、特別活動に力を注ぐあまり、日常活動がないがしろにされ、肝心の放送技術が低下してしまうというのが例年の課題となっていた。第1期の活動評価では放送での読み間違いや詰まり、笑い声などによる聞

資料3 同一生徒の体育委員会への評価の変化



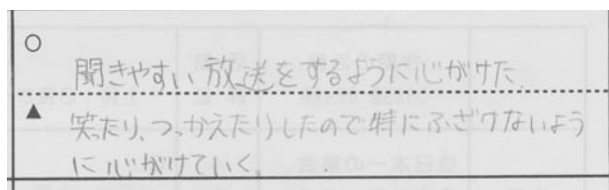
きづらさに対する改善要望が40件あまりあがっており、昨年度からの改善が図られていないことが明確であった。リーダー自身は評価の内容を重く受け止め、改善の意思があったものの有効な改善策を打ち出せないまま、第2期の活動を迎えてしまった。しかし、第2期の活動評価では最も全校評価が向上した委員会となっている。自由記述欄には「放送が聞きやすかった」という意見が多くなっていたが、特に注目すべきは「以前と比べて良くなった」というより良い変化を認める評価（資料4）が14件あったことである。実際に放送を聞いていると読み間違えや詰まりが減り、読み上げるスピードが改善されていることが分かる。これは評価活動を受けてフォロワーが委員会への所属意識を高め、自らの役割に責任を感じるようになったこと、自ら活動を改善しようとする自浄作用が醸成されたことの表れ（資料5）である。以上のことから評価活動を反映した委員会活動の実行と再評価活動は、リーダーの改善意欲の向上、フォロワーの所属意識や責任感の向上に有効であると考えられる。

資料4 放送委員会の改善を認める評価コメント



○ 昼の放送がわかりやすくなってきているのでいいと思います。

資料5 委員自身の改善意識が見られる評価コメント



○ 聞きやすい放送をするように心がけた
▲ 笑ったり、つかえたりしたので特にぶぜりないよう
に心がけていく。

5 研究の課題

本実践については今まで述べてきたとおり、①評価活動により全校生徒がお互いの委員会活動に興味・関心をもつようになったこと、②数値による客観的な評価がリーダーの意欲と責任感を醸成したこと、③フォロワーの所属意識が高まり、自発的な改善意欲が芽生えたこと、などの効果が認められた。しかし、その一方でいくつかの課題も散見された。

課題の1つ目は、評価対象が委員会全体の活動ではなく、個人に向いている傾向があることである。第2回の1年生の評価結果で、給食保健委員会が全10委員会の中で最低評価を受けている。この原因としては、給食時の合掌当番生徒の声が極端に小さいことが考えられた。また、3年生の評価の中には活動を客観的に評価せず、委員長との友好関係で結果が左右されている傾向も見られた。より客観性の高い、偏りのない評価方法の改善が必要である。

課題の2つ目は、活動のマンネリ化をどう防ぐかである。本実践は今年度が初めての取組であるため、目新しさも手伝って多くの意見が寄せられている。2年目、3年目と継続したときに、リーダーたちの改善意識をどう継続させるか、フォロワーの建設的な意見をどのように引き出していくかが課題となることが予想される。

課題の3つ目は、評価活動のスリム化である。現在の方式では数値の集計や意見の集約、全校集会での発表に多くの労力と時間がかかっている。全校生徒の意見がよりスピーディーに伝えられる方法や伝えやすい雰囲気作り、発表に効果的な媒体の選定など、発展的改善の余地があると考えられる。

参考文献

- 荒木 充 「「評価活動」を生かした生徒会活動の取組について」 『教育実践研究』第19集，上越教育大学学校教育センター，2009年，159～164pp
- 黒田隆夫 「「縦」，「横」，「斜め」のつながりを意識した係活動の試み」 『教育実践研究』第21集，上越教育大学学校教育センター，2011年，239～244pp
- 佐藤吉史 「当たり前のことを当たり前にする生徒の育成」 『教育実践研究』第21集，上越教育大学学校教育センター，2011年，233～238pp
- 文部科学省 『中学校学習指導要領 特別活動編』